『性の歴史１』

イントロ１（前回の続き）：ジャン＝ピエール・デュピュイ「未来の追悼」、橋本一径訳、『世界』（岩波書店）、二〇一一年五月号、No. 817.「ジャン＝ピエール・デュピュイが紹介するギュンター・アンダースの寓話で、ノアは「時間の向きを変え」「明日の死者を今日悼む」ために災悪を予言するが、この時間の捩れの襞には、さまざまな情動や沈黙がたたみ込まれているはずである。」：「喪の時間」を奪うさまざまな時間性の交錯。

イントロ２：・ミシェル・フーコー『安全・領土・人口』（コレージュ・ド・フランス講義一九七七～一九七八年度）、高桑和巳訳、筑摩書房、二〇〇七年。

「安全装置」論（一八世紀後半以降）：規律権力が許可と禁止という対立で機能するのに対して、安全装置とは、ある平均値＝正常値を定め、さらには超えてはならない限界値を定めることにより、「想定」される蓋然的な出来事に介入し、それに対するコストの計算を行うようなプログラミングの技術である。

『性の歴史１』

* 主な主題
  + １）「抑圧の仮説」の批判。権力は否定的なものではない。むしろ性についての言説は近代において増大させられてきた。権力は「語らせ、記録し、管理する」
  + ２）性的な「異常」〔倒錯〕が散乱する。
  + ３）性の科学：セクシュアリティと「科学的な知」の関係（精神分析）
  + ４）「性的欲望の装置」：フーコー権力論のまとめ
  + ５）生の権力、生政治「生かす権力、死ぬがままにする権力」

　予定：

　 5月23日：廣瀬が第二章「抑圧の仮説」１言説の扇動を34頁あたりまで解説

以下10頁ずつくらい当て、一回の授業で二人発表、一人がコメンテータ

5月30日：p. 35-46/47-56

6月13日：57-63/69-78

6月20日：78-88/106-111

6月27日：111-118119-124

7月4日：まとめ、ディスカッションタイム

参考文献：

・檜垣立哉『生と権力の哲学』（ちくま新書）

* 『フーコーガイドブック』（ちくま文庫）
* リディア・フィリンガム『フーコー』（ちくま文庫）
* ＝＝
* 評価など：
* １）レポートなど
* あたった人はなし
* コメンテータとその他の人はレポート（ただし枚数に差）
* 他にコメント、議論を求めるので、発言なども考慮。